

アジアのモダニズムーその多様な展開：インドネシア、フィリピン、タイ

崔敬華

本展で取り上げられたのは、植民地化や王室による近代化政策によってモダニズムが取り入れられたインドネシア、フィリピン、タイの3カ国。東京、マニラ、バンコク、ジャカルタの4都市で、1995年に開催された。各国から招かれたキュレーター3名と日本人キュレーター3名が連携し、現地調査を経て国別に展示を構成した。19世紀末から現代までの作品を網羅し西欧近代の受容を踏まえながら、反モダニズムを掲げた美術運動や、個々のアーティストによるナショナル・アイデンティティの模索などを多元的に取り上げることで、西欧近代が内包する普遍性への批評を試みた。

建畠哲は、展覧会図録巻頭に掲載された論考「批評としての美術」を「“アジア”は（西欧モダニズムに対する）対抗的な価値として主張されるべきではない」^{[1][2]}という一文から展開する。1980年代以降、美術分野でも浸透し始めた多文化主義が陥りやすい対等主義、絶対的相対主義、あるいは差異の固定化を警告しながら、「ある地域の歴史、社会のなかでつくられた鑑定基準が、他者の文化の鑑定基準と価値を共有しうること」^[3]にこそ、思想としての多文化主義の意義があると主張する。しかし一方で、水沢勉が論考で書いているように、モダニズム神話に回帰することなく、自己と他者の差異を模索し続けることは、「その先にぼんやりと『アジア』を夢見ることにもはや拒（む）」^[4]のである。

[1][3] 建畠哲「批評としての美術」『アジアのモダニズムーその多様な展開：インドネシア、フィリピン、タイ』展覧会図録、国際交流基金アジアセンター、1995年、p.13

[2]（）内は執筆者による補足。

[4] 水沢勉「〈迷子〉のささやきーリアリズムの系譜」『アジアのモダニズムーその多様な展開：インドネシア、フィリピン、タイ』展覧会図録、国際交流基金アジアセンター、1995年、p.63



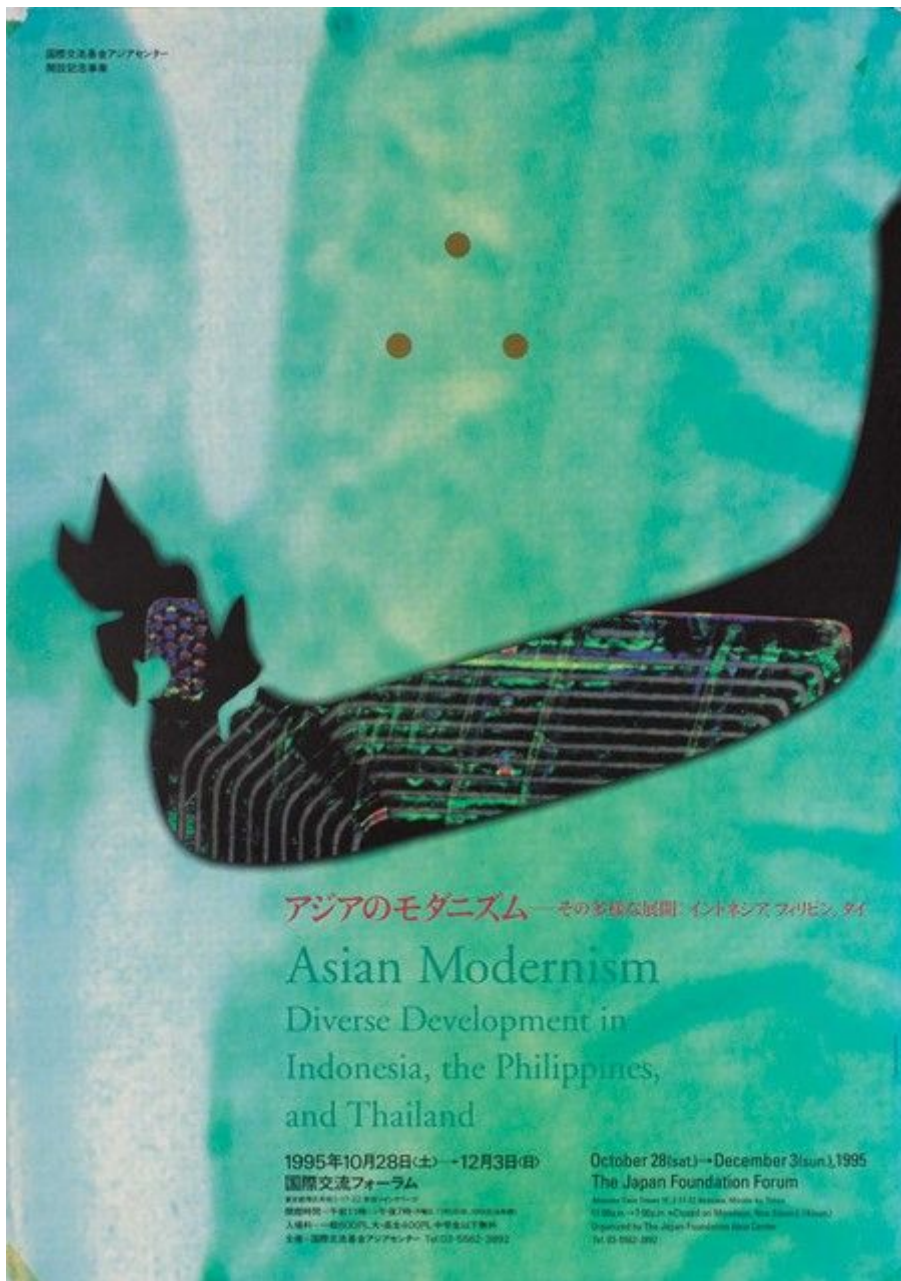
「アジアのモダニズム」（インドネシア部門）会場風景、国際交流基金フォーラム、1995年
写真：上野則宏



「アジアのモダニズム」（タイ部門）会場風景、国際交流基金フォーラム、1995年
写真：上野則宏



「アジアのモダニズム」（フィリピン部門）会場風景、国際交流基金フォーラム、1995年
写真：上野則宏



「アジアのモダニズム」東京展ポスター、1995年
デザイン：近藤一弥

関連リンク

- 国際交流基金アジア美術アーカイブ「アジアのモダニズム」
https://www.jpf.go.jp/j/publish/asia_exhibition_history/17_95_modernism.html